

第 61 回剣道中央講習会の結果について

1 日時

令和8年4月4日(土)～同5日(日)

1日目(4月4日) 13:30 開講

2日目(4月5日) 11:45閉講(全日程終了)

2 場所

千葉県勝浦市

日本武道館研修センター

3 主催

(公財)全日本剣道連盟

4 参加者

○ 主催者

真砂威会長、藤原崇郎副会長、中谷行道専務理事兼副会長

蒔田実副会長、濱崎満常任理事

○ 講師

香田郡秀範士(試合審判委員会委員長)、松田勇人範士(指導委員会委員長)

山中洋介範士(指導委員会)、奈良隆(普及委員会学校教育部)

宇賀神良博教士(試合審判委員)、越智小枝(医科学委員会)

○ 幹事

中村充教士

○ 受講生

◦ 全国都道府県剣道連盟、全国組織剣道関係団体 70名

◦ 茨城県 岡田宗久教士七段

5 内容

《1日目》

○ 令和8年度全日本剣道連盟事業計画、剣道連盟における倫理に関すること、  
剣道普及に関すること (中谷)

○ 剣道試合・審判法(現状の課題、留意点、二刀流に関すること) (香田・宇賀神)

○ 指導法(基本指導法、木刀による剣道基本稽古法) (松田・山中)

○ 稽古研鑽会 (講師全員参加による回り稽古 2分×15回)

≪2日目≫

- 剣道普及に対する取り組み(剣道未来プロジェクト等) (奈良)
- 指導法・救急対応(怪我の未然防止対策、救急対策) (松田、越智)
- 指導法(日本剣道形) (松田、山中)
- 稽古研鑽会(回り稽古・2分×10回)
- 質疑応答
- その他(懇親会等)

※詳細は別紙のとおり

## 別紙

### 概要・指示説明

#### 1 開講式

##### ○ 真砂会長挨拶

全国からの講習会参加に感謝したい。

新年度最初の講習会であり、全剣連としても最も重要視している講習会である。円滑に講習が進むようお願いしたい。

効率よく講習を進めて頂き、都道府県に戻った折には全国にシッカリと伝達いただきたい。

#### 2 講義

##### 【事業計画等】（中谷副会長兼専務理事）

全剣連における現状と課題については、今回の受講者の多くがすでに各種会議等で耳にしている案件であり、既承知案件である。

本日は時間の都合もあるため簡潔かつ要領よく説明したい。

後ほど確認いただくと共に、「剣窓」も一読願いたい。

##### ○ 大会・講習会(スライド②)

令和7年度の主催大会は、例年通り実施した。

今年度(令和8年度)も例年通り開催予定である。

##### ◦ 全日本選手権大会

観客動員数の推移を見ると、令和5年6,000人、令和6年度8,000人、令和7年度9,850人つまり約10,000人と、数字の上では増加した反面、申込数に大きな変化はみられない現状にある。

そこで昨年の施策として、小学生の無料招待を10,000人分の3,000人とし、テレビ放映があるところに人を集める背策を講じた。

この効果としては、テレビを見た人からすれば「剣道の全国大会に沢山の人が観戦している。剣道はすごい人気だ」と感じて貰えることになるし、何より、子供達の関心が高まる。

令和8年度は、全日本選手権大会の観客数を何とか10,000人超にしたい。

皆さんも全日本選手権大会に応援に足を運んでいただくと共に、子供さんを連れて観戦してほしい。

##### ◦ 国際大会

世界選手権ミラノ大会では完全優勝を果たすことが出来た。

今年5月にはアジア・オセアニア剣道連盟が21の国と地域によって創設されるが、初代会長は蒔田副会長が就任する予定である。

それに併せてアジア・オセアニア大会が今後の加盟予定も含め、23の国と地

域で開催を予定しており、参加する選手は 350～360 名程度になる。

個人戦は三段以下と無制限の2パート。3段以下の部には日本と韓国は出場させず、アジア内での剣道人口拡大に努めていきたい。

また、この大会で優勝することにより剣道に対するモチベーションを高めるために頑張ってもらいたいと考えている。

アジア大会への観戦申し込みについては、当初は、人が集まるのかどうかなど、疑心暗鬼ではあったところ、大会開催の発表直後から毎日 700 名からの問い合わせがあるなど、安心しているのが現状ではある。

一般観客は 1,000 名程度を想定したこともあり、現在は多少様子を見て、申込受付を制限している状態にある。

会場となる「東京武道館」は観客席も少ないことから、きっと満席になるものと感じている。

- 世界選手権大会

令和9年度は、第 20 回記念大会が予定されている。

今回の開催地は日本国の東京都内。

資料には、「日本武道館」と記載されているが、正式発表(9月以降)までは極秘事項であるため理解のほど宜しく願いたい。

- 審判員講習会の開催

全日本選手権大会の審判員は範士八段が該当するが、試合前には研究会や勉強会を行った。今後も継続していくこととする。

また、指導法及び講習会は、令和8年度は東西講習を見送りとする。

令和7年度中の後援講習会は全国において 20 県で実施したが、令和8年度もほぼ同数で計画中である。

- 剣道人口拡大プロジェクト(スライド⑤)

今後も剣道を継続して人口確保を図っていくため、「剣道人口拡大プロジェクト」に取り組んでいく。その目的は、「正しい普及と後継者育成」という最大目的にある。

明日のプロジェクトに関する説明時、詳細を示したい。

- 財務(スライド③)

令和7年度の財務状況は、ほぼ収支均衡で推移している。

ただ、大会が開催されれば派遣費用が掛かりミラノ大会では派遣費用に 500 万円を要した。そのためにも、今後の大会運営等も勘案すれば、毎年余剰金を作っていかなければならない。

今後、更なる改善が必要であると認識している。

当面の対応としては「寄付」で賄うことを考えており、今月から全剣連幹部が全国の都道府県剣道連盟にお願いに回ることとなる。

永続的な課題としては、世界大会が3年に一回開催されるにあたり、その都度、海外派遣が必要になる。

これらのことから、「世界選手権応援クラブ」の会員拡大と募集を進め、大会運営のみならず剣道普及活動にも使っていくこととしている。

「応援クラブ」の年会費は 5,000 円。

若年層の剣道人口が大きく減少しているため、普及活動に何とかお金を使って子供たちの育成を進めていきたいと考えている。

剣道人口減少に歯止めをかけるため、お金が必要になっているのが現状である。

○ コンプライアンス(スライド④)

コンプライアンス対策は、何のためにやるのか？

ハラスメントや暴力によって剣道の勝ちを傷つけられたくない、というのがその理由であり、重要なことである。

ただ単に批判を受けることを防止するということではない。

一旦不祥事が起こると、剣道自体が社会から敬遠され、人気は落ち込み、競技人口が減少し、事業縮小や競技の低下など負のスパイラルとなる。

全剣連は強い決意を持って不祥事の防止に取り組む。

○ 剣道人口の減少(スライド⑤)

高校生人口の減少を見て頂きたい。

平成 15 年には 381 万人いたところ、令和6年は 23.4%減の 292 万人。

ところが、剣道部員の人口の推移を見ると平成 15 年に比較して令和6年は、59,000 人と 46%も激減しており、高校生人口の減少傾向よりも、剣道部人口は 46%減となっている。

この要因は何かと言えば、剣道の魅力を訴え切れていないのではないだろうか？と考えられる。

同じ武道である弓道は減少しているとはいえ、全体人口の減少率よりもかなり低いということからすれば、実質的には競技人口が増加しているということ。

これらの要因等も考えなければならない。

そこで、全日本剣道連盟として、組織全体を挙げて取り組んでいくこととしている。

現在の施策として…

村上もとか氏(「ムサシの剣」作家)を「初代全剣連アンバサダー」に委嘱して、あらゆる場面で活動を促し剣道人口減少を食い止めていきたい。

当然ながら、剣道会のイメージダウンにつながる不祥事自体もなくしていく。

○ 不祥事については増加傾向にある。(スライド⑥)

世の中の風潮として告発が増加しており、特に実名告発が増加している。

実名で告発するということは、余程ひどいことがあったということであり、覚悟を持って覚悟を持って告発していることがうかがえる。

事例として…最近の傾向を見ると

- 剣連役員が気に入らない人間を攻める場面がある。

「お前には〇〇県内では剣道をやらせないようにしてやる」など、自分が実力者であるという認識があるからこそ、そのような言葉が出る場面がある様だ。

役員は、このような言動が出ない様に理解しておくことが求められる。

また、全剣連において当事者にヒアリングした際、「全剣連における倫理に関するガイドライン」が整備されていることを知らない、分からない人が多くいる。

研修会や講習会においてコンプライアンスに関すること、ハラスメントに関することなどのコマを設けて頂きたい。

組織を挙げて注意喚起をしていくことが大切である。

#### ○ 行事日程

- 都道府県大会⇒施設改修で大阪が使えないため、2年連続で和歌山開催  
※監督資格について

国スポ大会では、監督従事者は「社会体育指導員資格」を有していることが義務付けられている。都道府県大会の監督も国スポ同様の対応とした。

- 東西対抗大会⇒長野県開催
- 全日本選手権大会⇒男女同時開催で、観客席を一杯にしたい。
- 共催大会⇒ 錬成大会は、現在、日本武道館と協議中ではあるが、「監督・引率者は、社会体育指導員資格を有していることが望ましい」とされる方向。
- 審査会⇒例年通り開催する。
- 居合道⇒居合道の八段審査会は例年 5/8 としていたところを 5/1 とした。  
理由は、居合道と剣道演武の混雑を避けるためである。ご理解を。
- 東西審判員講習会⇒令和8年に限り、開催しない予定である。
- 強化合宿⇒ これまでは「強化候補選手」として合宿を行っていたところではあったが、今年からは「強化選手」の位置づけと共に、選手を 15 名に絞り、うち 9 名が世界大会に出場する。  
男子合宿の 6 回目はドイツで開催し、女子合宿の5回目はカナダ。  
いずれも体格差が違う環境や相手と練習することで慣れや技術を高めるため。
- 合同稽古⇒ 関東稽古会は場所の都合で毎月開催が難しい面がある。  
4.5 月は日本武道館で開催する。
- 全日本女子七段選抜選手権大会  
⇒ 今年度までは山梨県主催とし、来年度以降は全剣連主催で計画中。
- 全日本実業団女子・壮行年大会  
⇒ 全剣連としても力を入れていく。
- 全剣連後援講習会⇒全国で 19 の講習会が予定されている。

## 【試合・審判法】（香田講師・宇賀神講師）

### ○ 試合・審判規則の解釈と運用

#### ◦ 有効打突の取り消しについて

有効打突を取り消す場合は、合議により対応している。

規則第 27 条によれば、宣告した後に取り消すこととなっている。

この部分については 10 年以上前から「宣告してから取り消す」こととしていたものであり、講習会でもその様に指導していた部分であるが、講習で指導を受けた者達が伝達する際に誤った解釈のまま伝えたため、今に至っている。

要領としては、「取り消す打突部位」を宣告してから「取り消し」の宣告と旗の表示をすることで意思統一をお願いしたい。

規則書の 25 ページ、別表「審判員の宣告と旗の表示方法」の「有効打突を取り消すとき」の「宣告」の記載は「取り消し」しか記載されておらず、今後改正する際は修正が必要な部分である。

取り消す際は、「面有り。取り消し。」と宣告しながら両旗を前下で左右に振る表示を行うこととする。このことは以前から指示されていたことであり、正確に伝わっていないことであったため、今後、都道府県で伝達講習等を行うこととなるが、その際は確実に、正確に、正しく、伝達して頂きたい。

なぜ取り消す際に「取り消す打突部位」を宣告してから「取り消す」のかというと、以前発生した事例として副審の 1 人が白の小手に旗をあげた。副審の 1 人は赤の面に旗をあげた。

主審は赤に旗をあげた。この後、合議の上一本が「取り消し」の宣告を受けた。

さて、どちらの技が「一本」と判断された後に「取り消し」になったのか。周囲にも、当事者にも全く分からない状況となった。

こういった場面などを明確に示すため、このような宣告にすることで意思統一をお願いする。

#### ◦ 試合の中止要請

「運営要領(赤のページ)」の 6 ページを見てほしい

「試合者は、試合中止の要請をする場合、手を上げ、かつ、発生し…」と記載されているが、何と発生したら良いのか記載がない。「発生」とは何か？

何と云えばよいのか？

これまでも「タイム」を一般的に使用していた。

(一部の先生方から「横文字を使うな」などと言われたこともあるが…)

今後、検討していくこととしているが、この場合の発生は「タイム」で統一する。大切なことは、主審に向けて大きな声で意思表示をすることである。

大きな声でアピールすることで統一をお願いしたい。

世界大会では、黙って手を上げる者もあるが、国際的にも「タイム」で通じる。大きな声でのアピールで統一する。

今後、必要に応じて対応していくこととしたい。

- 団体試合の整列方法

「運営要領」の 14 ページ、図 1 試合前後の整列方法(1 チームの場合)に示している図は誤りである。図では、1 チームしか試合場内に入っていないにもかかわらず、審判員が 2 組整列している。

今後、改正する際に修正していく。

- 剣道試合の更なる発展を目指して

- 残心について

残心については、示していない場面や示し方が悪いものが最近特に目に付く。全国選抜大会などでは、打突後、自分のチームに向かって構えたり、横を向いて意思表示したり、相手に対して構えていないことが多く見られた。

高校生ばかりが益々悪くなってしまっている。

残心とは、打突後に相手からの攻撃に対する身構え、気構えをいうのであって、現在の試合では相手に対する身構え、気構えを示していない。

審判にあたってはよく見極め、県に帰ったらそのところをよく指導してほしい。ただ、残心を示すとはいえ、例えば小手を打った後に体が相手の正面に向いていない場合もある。

しかしその場面では、体は横を向いていたとしても、目と顔は相手方を向いて相手からの次の打突に備えていれば、身構え、気構えがあると言える。

また、玄妙な技などの際は瞬間的な残心もある。

審判する上で残心を判断するにあたっては、総合的に見極め、残心の有無を確実に判断してほしい。

それはつまり、打突後は目を離さずに最後まで見極めて、総合的に判断するということである。

韓国の選手や指導陣からは、日本の選手や試合を見ていて残心がないことが散見される、日本選手は残心がない、などと指摘されている現状にある。

- 打突後に竹刀で床を叩く行為について

試合中、打突後に床を叩く行為が散見される。特に、高校生や学生が一本打った後に床を叩くことが多いと感じているが、この行為は不適切な行為として厳格に取り扱いをお願いしたい。

不適切行為と判断して反則を取っても良い。

最近では、昇段審査などでもみられる行為であり見苦しい。厳格に指導をお願いしたい。

- 顔(面金部)を拳で叩いたり、竹刀を首にかけるといった暴力行為について

数年前にこれら暴力行為は厳に行わないことを各種講習会等の機会を通じて指導した結果、改善されていたものの、最近になってまた増えてきている。

これら暴力行為に発展してしまうのは、正しい鏝競り合いを行っていないこと

が起因しており、正しい鍔競り合いとは何かを指導者自身がよく理解した上で指導すべきである。

また、鍔競り合いから区内を相手の首にかけたり、強く押したりなどの行為自体は反則行為である。

試合中に行われる場面では、程度があるため一発で反則とするか否かについては考え方が分かれる部分でもあるため、1回目は反則として取れない場面でも、2回目からはしっかりと反則として認識して対応することをお願いしたい

#### ○ 二刀の試合・審判について

二刀については、アジア・オセアニア大会での審判講習会で指導された案件である。海外選手には二刀の選手が多く、特にアジアの選手に多い。

以前の世界選手権大会では中国の選手5名全員が二刀で出場するなど、二刀に対する関心と正しい対応は注目を集めている。

二刀に関する規定としては資料の通りであり、それに沿って説明したい。

##### ◦ 柄を握る位置

「運営要領の手引き」の事例7を見てほしい。

二刀では、竹刀を握る位置として柄頭を握るのを原則としている。

ただし、柄を握る位置だけにとらわれて反則か否かを判断することは難しく、一概に決まるものではない。

防御一辺倒になっている場合や最初から引き分け狙いとなっていることが伺え場合は、合議の上、規則第1条に照らして反則とすることが出来る。

また、接近した場合などで鍔元を握る場面があるが、この場合は刀法や間合などを勘案し、問題視しないこととしている。

近年では学生なども二刀が増えており、これら質疑が増加している傾向にあるため今回の講習会で説明が必要と感じたものである。

##### ◦ 資料のQAへの追加

《抜刀納刀について…》

二刀の抜刀納刀は正しく行うよう指導しているが、中には一方の刀を脇に挟んだり、刃部を握ってから構えたりなどする者がいる。

これは基本的にダメ。ただ、反則までのものではなく、指導にとどめる事項である。

《小刀の有効打突について…》

記載の通りであるが、例えば、太刀で相手方の竹刀を打ち落とし、小刀で、十分に肘を伸ばして相手方の打突部位を正確に、有効打突の要件要素に満たしている場合は一本になる。

肘はしっかり伸びて打突していることが重要である。

《竹刀の代替え…》

運営要領の手引きでは、替えの竹刀がなければ試合不能者として負ける」

とされているが、一刀用の竹刀を勝って対応することは可能か。との問いに  
対しては、次のとおり対応すること。

【替えの竹刀の運用…】

運営要領の手引きには「替えの竹刀がない場合は負け」と明記されている  
が、替えの竹刀がない場合は、運営上、当該二刀の選手はもともと最初から二  
刀として出場しているのだから、二刀についてと言及しているため、一刀用の  
竹刀を使うことはできない。

《鏝競り合い…》

通常、鏝競り合いでは、小刀が下に(相手方)、大刀が上に来るように交差さ  
せて鏝同士を隣接して競り合う。

この場面では、逆交差になることもあるが、その場合一発で反則を取ること  
まではせず、再三の指導にも拘わらず指示に耳を傾けていない状態であれば、  
合議の上、反則を徴することとする。

なぜ小刀が下にするのかというと、試合や稽古を行うにあたって、安全性  
や公平性の問題を考慮したものである。

Q5。

二刀の鏝競り合いでは、相手方の太刀を中心にして両刀で挟む形が正式な  
鏝競り合いであるが、動きの中で中央からずれる場面もある。この状態が継  
続したとしても、双方に有利不利は生じないと考えられているため、特に問題  
視することとはしていない。

ただし、鏝競り合いを指導している中では、相手方の竹刀は両刀の中心に  
来るようになるのが正しい鏝競り合いであるとしている。

Q6。

鏝競り合いの解消時の足であるが、左上段の者が分かれる場合、剣先が離  
れるところまで引いて構えなおす際、右足前の状態から左足を前に出して上  
段に構えなおすようにされている。しかし、二刀の場合は、正二刀も逆二刀も  
左足前、右足前いずれもあり得るため、必ず右足前と拘る必要はない。足の前  
後は問題にしていない。

加えて、二刀の者が鏝競り合いを解消する際に、大刀はそのままの状態  
引きつつも、小刀で自身の打突部位を隠したり、小刀で相手方の竹刀を抑え  
るような場合は、一刀同士の試合で鏝競り合いを解消する途中に構えを解い  
たり、払ったり、押さえたりするのと同じ解釈として頂きたい。

つまり、当該行為が見られた場合は、合議の上、反則に該当する場合は反則  
とする。規則第1条に照らして考えて頂ければ問題ない。

Q7。

いわゆる十字の構えは反則か？という点については、一刀でも八相の構え  
や脇構えがあるとおり、二刀においても同様に様々な構えがあると判断して

頂き、問題視していない。

Q8。

小刀を落とすと同時に打った技の効果については、打突動作に入っていたか否かで判断して頂きたい。有効打突の要件要素を満たしていれば、たとえ小刀を落としたと同時に打った技であっても有効である。

打突動作に入っていないのであれば一本ではない。

Q9。

逆二刀からの小手打ちでは、上段からの打突と同様に刃筋も機会も分かり易いが、正二刀からの小手打ちの場合は、刃筋が立っていない場合が多く、一本の要素として挙げられている打突の好機を捉えていない場合が見られる。

払う、叩いて動かす、体を開いて寄せるなど、何らかの動作により相手方が動いているかなど、ただ打つのではなくこの点にも注視していただきたい。

Q10。

柄の長さについては、安全面の部分に配慮して極端に短い柄を大刀に使用しない様に周知指導している。

ただし、今後検討委員会で安全性確保の観点から柄の長さの規定を検討していくこととしており、決定した段階で周知したい。

#### 【試合・審判実技】

○ 「運用の手引き」の内容は変えていない。

高校生の鍔競り合いの位置が高いのが気になるころではある。

鍔競り合いというより、拳同士を合わせる形になるため、顔面をガツンとやったり、首に竹刀を当てて強く押したりなどが、結果として出来てしまうという弊害はあるが、以前に比べて鍔競り合いは良くなったと感じている。

○ 以前の中央講習会において説明したところ…

「鍔競り合いはなくなった」や「引き技はとらないことになった」など誤った認識が伝えられてしまった。

鍔競り合いからは技を積極的に出して分かれることを指導したつもりであったが、「引き技はとらない」と誤って伝えられ、大変心外であった。

今回の講習会では、説明していることをしっかりと理解した上で所属に帰った時は、正しく伝えて頂きたい。

○ 実技の中からの指導…

◦ 鍔競り合いについて詳細説明

県に帰ったら正しく伝えて頂きたい。

鍔競り合いの形は

「相手の肩の近くまで竹刀が傾けられる」

「拳同士で合わせる形ではない」

「両手が高くなることはなく、腰の位置まで下がるのが正しい鍔競り合い」  
「上記の形になっていれば、相互に接近することはなく一定の間が生まれる」  
「右腕を伸ばして競り合う形である」

ダメな点は

「腕を折り曲げる」

⇒「拳の位置が高くなる」「竹刀が立つ」「逆交差が可能になる」「暴力行為に繋がる」

- 正しい鍔競り合いをしていない  
⇒「不当な鍔競り合い」をしているのだから、厳格に反則を取ってほしい。
- 鍔競り合いでの左拳の位置
  - ・ 胴の下でしっかりと腰を据えて行う。
  - ・ 鍔競り合いは休憩ではない。相互に緊迫した状態である。
  - ・ この形は高校生には指導していかなければ理解されていない。
  - ・ 試合を行う以前に、指導者が指導する段階でしっかりと指導すべきである。
  - ・ 試合に入ってから縛り付けるのは難しく、指導法と試合審判法が連動していかなければ、正しい鍔競り合いが行われることはないと理解してほしい。
- 竹刀が立った同士の鍔競り合いと言われるものでは、お互いに力を利用して分かれることが出来ず、何回でもくっつきあってしまう。  
正しい鍔競り合いが出来ていなければ、この行為こそ「時間空費」であり、反則行為である。
- 左手と腰の重心をしっかりしていれば、引き技を打たれることはなく崩しも効かない。
- 鍔競り合いの解消については、相互の剣先が完全に離れるまで、積極的に解消していることが求められる。  
特に上段の構えの選手が離れる場合、完全に間合いを切らないことで相互に不利・有利が存在してしまうので、確実に剣先が離れるまでをもって鍔競り合いの解消となるよう指導することが必要である。
- 鍔競り合いの解消は、競り合う力を利用し、積極的に相手の押し合う力を相互に利用して、飛び下がるようにして下がることである。  
ゆっくり下がることは、ここにいう解消しようとする行為ではない。
- 試合場主任の任務  
審判員があやふやな場面では、主任が笛を吹いて主審を呼び、確認を促すこと。ただし、主任は「赤が反則ではないのか」などと決める権限はなく、あくまでも「確認してください」などと審判員に対して疑義のある点について確認を促す。

- 審判実技①【主審・中原(官公庁)、副審・今泉(大阪)、三崎(神奈川)】
- 整列の位置では、お互いの肩が触れ合う程度の感覚を保持すること。
  - 開始早々に「止め」をかけて竹刀の中結の位置を修正させたが、この場合、竹刀に問題があるのだから交換させること。
  - 面を打った技については、打突部位を捉えていたとは思いますが気迫がなく、要件要素に照らして一本になっていないと判断した点は評価できる。
  - 主審の位置関係で修正があった。(主審が中心に来ていない)
  - 旗の表示(引き分け)が曖昧との指摘があった。
- 審判実技②【主審・本持(滋賀)、副審・菊地(埼玉)、杉山(広島)】
- 立姿勢が既に腕が前に出ている。
  - 終了時間と同時の打突は一本である。また、終了時間に仕掛け動作に入っている技も一本の要件要素に該当していれば一本である。
- 審判実技③【主審・工藤(京都)、副審・野間(鹿児島)、今泉(宮崎)】
- 上段選手の審判にあたっては、突きが見える位置まで移動する。
  - 副審同士が、中段同士の試合に比較して近くなってしまうのはやむを得ないが、審判員相互にお互いに出来るだけ見える位置になるように配慮しながら審判をすることに心がける。
  - 鏝競り合いから別れる際、左足前で分かれていたのを見逃さないこと。  
1回目は見逃す、又は、様子を見たのかもしれないが、2回やったら反則である。
  - 上段選手の打突部位を隠す行為についてであるが、上段選手が中段選手からの打突を避けるために打突部位を隠す行為は、1回目は咄嗟に避けた行為として判断したとしても、2回行えば反則の対象である。
  - 迷った時は、規則第1条に照らし、立ち返って判断すれば正しい判断が出来る。

【指導法】(松田講師、山中講師)

○ 「剣道指導要領」「剣道講習会資料」

指導法は、「剣道指導要領」と「剣道講習会資料」に尽きる。指導にあたっては確実に読み込んで指導に反映して欲しい。

また、剣道講習会資料の 9 ページに掲載している「指導法講習における重点事項」を踏まえた指導の徹底をお願いしたい。

○ 指導者の在り方について

竹刀を道具にしていけないだろうか。

指導時における竹刀の持ち方を考えて頂きたい。

竹刀は竹刀であり、「指示棒」ではない。特に、指導を受けている者に対して後ろから叩いたり、突いたりして指示したり、かかり稽古の折、尻をたたくなど言語道断である。

指導時は、竹刀を「下げ刀」の形で弦を下に向けて保持する。

歩くときも同様である。

指導者は常に見られていることを忘れてはならない。意識すべきである。

剣道における動作はすべて、指導者としての意識を保持しておくこと。

説明する時などは特に。

木刀の場合は右手で保持し、竹刀の場合は左手で保持する。

指導者が求められる姿を、周囲に示すことが大切である。

○ 正しい鍔競り合い

先日開催された全国高校選抜大会では、悪い鍔競り合いが特に目に付いた。

両手が上がり、鍔同士ではなく、拳同士で接している。だからこそ相手の面に竹刀をかけたり、顔を押ししたりひどい状態が見られた。

試合中に直ちに修正しろと言ってもなかなか治らない。試合に関する指導と日頃の指導法が連動していかなければ治らないのが現状と言える。

指導者は、日々の指導の中で正しい鍔競り合いについて指導していく必要がある。

・ 正しい鍔競り合いとは

・ 左手、右手いずれも体の中心に位置する。

・ 右拳は動いている中では多少ズれる場面もあるが、左拳は中心からズれることはない。

・ 右肘がまがってしまっていないか。駆け引きのために肘を曲げている。

正しくは肘は伸ばしてシッカリ腰を据えて、腰の安定により鍔同士で競り合うことである。

・ これらは、一朝一夕では身に付かないため、日々の稽古で指導して欲しい。

激しい動きの中で逆交差になることを見かけるが、拳を中心にとり、腰を安定させ、中心を取り合い、お互いに背伸びする様にしていけば逆交差にはならない。

- 鍰競り合いからの暴力的行為の排除が求められる。  
そのためにも、鍰競り合いの中から相手をどうしていくのか指導させることが大切である。  
何度も言うが、指導法と審判法とが一体となって連携していかなければ、正しい鍰競り合いに繋がらず、鍰競り合いからの暴力的行為もなくなる。

#### ○ 残心について

- 遠い間合からの仕掛け技による残心と応じ技からの残心では、自ずと違う。  
残心とは、打突した後も油断しない気構え、身構えである。  
残心については形を作ればよいのではなく、精神的な部分の指導が大切であり、油断なく相手に対していつでも対応できる姿勢、気位をいうのである。  
「打てばよい」のではなく、打突後の身構え、気位、心構えが大切であり、しっかり指導をお願いしたい。
- 残心の形は、打突後に正対する面技や打った後に体が正対しない小手打ちなどの場合の様に技や間合によって違いがある。  
ただし、残心は体が正面に向いていなくとも目付は外すことはない。  
試合での打突後、相手に向かって構えるのではなく、自分のチームにアピールするように構えを示すのは残心ではない。  
目付は当然、体だけでも向けることを意識することで違いが出てくる。  
普段の稽古で指導をお願いしたい。  
特に、中・高校生に対する指導は、分かり易くしっかりと説明して欲しい。

#### ○ 木刀による剣道基本技指導法

- 日本剣道形と竹刀剣道との中継ぎとして、行われる稽古法である。
- この稽古法は平成15年6月に制定された稽古法であり、現在では、級審査にも取り入れられており、指導者が知らない、教えられないことの無いようにしてほしい。
- この稽古法を進めるにあたり、発展的な指導を行うとよい。  
例えば、足さばきなどは、すり足から次は踏み込み足へと学ばせるなど、基本稽古法とのつながりを学ばせるよう指導することも必要である。
- この稽古法の狙いは、「竹刀は日本刀」の観念を基にして木刀を使用して「刀法」や「作法」を理解し、適正な対人的技能を指導するものである。
- 打突は、常に打突部位の寸前で止める空間打突となるが、刀で「切る、突く」という意味を理解させる。

- 構え、目付、間合(一足一刀の間合)、打突(刃筋、物打ち、一拍子)、足さばき(すり足)、掛声(発声)、残心(中段の構え)を理解させること。

#### 《実技を交えて指導》

- 時間を短縮して指導を進めたい。
- 強調する部分については、よく理解していただきたい。
- 立合の間合いはおよそ9歩の距離として、3歩前進してからの抜き合わせと技が終了した時点での間合は、横手あたりを交差させる間合である。
- 打突の間合は一足一刀の間である。
- 打突は、充実した氣勢と適正な姿勢で、手の内を利かせて、刃筋正しく、物打ち(切先から10センチメートル)で、後ろ足の引き付けを必ず行い「一拍子」で行うこと。
- この練習法は、集団指導によって行うものであるため、日本剣道形の様に指導者と弟子の関係ではなく、「基立ち」「掛り手」の呼称として、相互に平等の立場で行うものである。

#### ● 特に留意しておくべき点

- 基本9、打ち落とし技。「胴打ち落とし面」について  
基立ちは右足を一步前に踏み出しながら右胴を打つ。

「掛り手」は、「左足からやや左斜め後ろに捌くと同時に、刃部の物打ち付近で・・・までは同じであるが、「原本」では「斜め右下方に打ち落とし」とされ、講習会資料では「斜め右下方向に打ち落とし」と記載されている。

一見すれば、「基立ち」の木刀を自分の体を捌きながら右斜めに打ち落とすかのような印象を与えるが、真っ直ぐに振りかぶって、真っ直ぐに打ち落とすということで統一している。

「すり流し」のイメージではなく、確実に直下に打ち落とすということである。

「掛り手」から見ると、自身がやや左斜め後ろに捌くことで、「基立ち」の剣先が右斜めに来ているといったイメージに感じてもらいたい。

その部分の標記については、「原本」の記載を変えずに講習会の指導を行っているということであるし、この点については、今後の課題として全剣連では捉えているが、今すぐに原本を書き換えるということはない。

真っ直ぐに振り被って真っ直ぐに、直下に打ち落とすということで統一している。

#### ● 「共通理解」として指導を要する部分

- 「掛り手」は残心をしっかりとること。
- 「基立ち」は「掛り手」をしっかりと引き出してやること。
- 打突はすべて「一拍子」で行うこと。
- 相手に正対する。視線は外さない、顔を向けること。

【指導法】(松田講師・越智講師)

○ 安全に配慮した適切な指導

講習会資料をよく確認の上指導にあたって頂きたい。

◦ 危険な行為の防止

稽古中、胴を抜かれそうになると足を出したり、身体を押したりするなど、悪質な行為が見られる場面がある。

相手に対して愛情と敬意を持った姿勢、礼儀に基づく指導が求められている。

◦ 世代や技量に応じた指導が求められている。

無謀な行為(体押し、足がらみ、組打ち、迎え突きなど)や人格を否定するような言動は絶無として、厳しい中にも達成感ある様な指導に心がけてほしい。

◦ かかる者に対する指導

面を打つ時に顎が上がってしまう者がいる。これは手打ちになっていないか。腰から出ていないのではないのか。迎え突きを受けて後方に倒れてしまうのは、かかる方にもその要因がある。

正しい打突、姿勢、下半身からの移動、体力の向上など、指導者はしっかりと指導することが求められる。

○ 剣道の重大事故と救急対応

◦ 突き技による重大事故

昨年、高校生同士の稽古中、突き技に起因する重大事故が発生している。

片方が諸手突きに出たところ、突いたままそのまま引かずに突き込んだ状態になった。

突きを受け受傷した者の喉部を確認したところ、外見的・表面上は問題は見られなかったため様子を見ることとして帰宅した。

帰宅後、喉部の内部が損傷していたことが判明し、救急搬送され一命をとりとめた。その症状は、強い突きにより飲食物が通る部分の粘膜が損傷し、空気が入り込んだ上に唾液と共にばい菌が入り込んだ状態であった。

異常があると感じた時は、無理をせずに早期の段階で病院等で診察を受けることを勧める。

◦ 意識障害

脳震盪や熱中症は命にかかわる事象であることを念頭に置くこと。

本人が「大丈夫」と言っても、頭を打った時点で練習を辞めさせることが大切。ストップをかけることが出来るのは指導者のみと理解して欲しい。

また、頭を打たなくとも脳震盪になることもありうる。

例えば、背の高い者と背の低い者とがぶつかった場合、背の高い者の胸に背の低い者がぶつかっただけで衝撃を受けて同様の症状になることがある。

どのような場面でも、一瞬でも意識を失った場合は練習から離脱させること。ぼーっとする、まだ痛い、力が入らないという場合でも練習は中止する。

試合では、頭を打った後でも本人が大丈夫！というそのまま試合に出場させる場面が見られるが、そういった場合、同じ状態でも、違う場面になっても、再度頭を打ったら命にかかわる場面になり得る。

明らかな症状が出ない場合であれば、資料の 3 の要領で確認し、脳震盪を疑った場合は資料の 4 で対処して頂きたい。

また、痛みがあった場合は、練習後の自転車や自動車の運転は控える。集中力がなくなっているため、事故を起こす可能性を秘めているため。

- 指導者としての心得

脳震盪等を疑う状況があった場合は、指導者として必ず家族に伝達・伝言しておくことをお願いしたい。帰宅後に症状が悪化したり、症状変化がなくとも念のため病院の診察を受けるような場面で受傷の状況が伝えられていないと、正しい治療に繋がらないためである。

たとえ過剰ではないか、と感じても指導者としての責務として必ず行って欲しい。

- 脳震盪でない場合

試合中や試合を待っている間に意識を失う事例もある。心肺停止など。

この場合はまず、AED での対応が求められるため

指導者はまず、練習等が始まる前に

◎AED の設置場所を確認しておくこと

をお願いしたい。

過去には、AED による対応中、3回目で意識を回復した事例もあるため、機器の反応を見ながら必要性があれば継続して行っていただきたい。

また、心臓マッサージも途中でやめることなく継続することが必要であるし、女性だからといって服を脱がさなかったために施術が遅れたり、出来なかったりして命を落とす事例もある。遠慮なく実施して頂きたい。

- 稽古中に意識を失った場合は、面と胴を必ず外す。

外し方は別途。

- 意識障害で倒れた場合、食べ物を吐いた場合は呼吸しているという証拠。

ただし、吐いても意識が戻らないのであれば、心臓マッサージと AED 対応が必要と考えること。

脈が分からない場合があるが、脈に拘らず心臓マッサージを実施する。

心臓マッサージにおいてろっ骨が折れることがあるが、肋骨が肺に刺さっても死ぬことはまずないと考えて自信を持ってマッサージを継続すること。

- この際の注意点としては、頭を動かさないこと。

頭部に障害があった場合、取り返しがつかないため。

【日本剣道形】(松田講師・山中講師)

- 日本剣道形は刀法を学ぶことが剣道とは何かを学ぶことである。  
「講習会資料」と「日本剣道形解説書」を熟読して頂き、そのうえでしっかりと勉強し、取り組んでいただきたい。
- 令和8年度中央講習会「日本剣道形」資料の「7.共通理解」については、「講習会資料」や「解説書」にかかっている内容の中で、記載振りが一部違うのではないかとと思われる様な部分がある。  
その部分について、両書の整合性を図るための共通理解としての内容であるため、しっかりと熟読し理解を深めて頂きたい。
  - 「共通理解」について説明する。
    - (1) 中段の構えの延長については、木刀による剣道基本技稽古法の指導書には記載しているが、他には記載していないためここで共通理解として記載した。「棟の鍔元と切先を直線で結んだ延長をいう。」
    - (2) 太刀一本目。  
解説書では「下段より低く」とし、講習会資料では「●●●●●」と記載している。整合性を図るため、「共通理解」において「剣先の高さは下段程度」と統一する。
    - (3) 太刀四本目。双方切り結ぶ位置については、解説書、講習会資料には記載がない。切り結びの位置は、およそ刀身の中央部として、剣先は正面の高さと統一する。
      - (3)-2 これまで解説書にも「切り結んだ後に双方鎧を削りながら太刀が下りてくる際、間合が近い場合は打ち太刀が引いても良い」というような指導を行っていた。  
しかしながら、そもそも相手の剣筋が見えないために慎重に進むのだから、双方ともに歩幅を小さく3歩前に出るのだ。打ち太刀が下がって間合をとらざるを得ないような進み方をしなければよいということである。  
最初から切り結び、合中段、入れ突きまでの動作を意識して小さく前に進めば、打ち太刀が下がるということはない、という意識を持つことをお願いしたい。
    - (4) 太刀五本目。仕太刀の中段の構えは、ひと拳前に出す。刃先はやや斜め下に向ける。
    - (5) 太刀六本目。一方の足を移動させたときは、他方の足を伴って移動させることが指導されている。  
ただしこの場合、仕太刀が摺り上げ小手を打った打ったとき、間合が近くなってしまう場合は、その間合によっては左足を引き付けなくとも踏み出したものと解釈する。
    - (6) 太刀七本目。仕太刀がすれ違いながら右胴を打つ時のこと。

右足を開くとは、横向きに開くのではない。

つま先は正面に向けた状態で右前に開くということである。

練度の低い者(三段以下)の場合は、原本通り、右足を右前に開いたときに左肩の上に太刀を振り上げ、左足を踏み出すと同時に右胴を打つことを指導して練度を高めさせる。

熟練者の場合は、右足を開いても、体を移動せずに刀を振り上げず、左足を踏み出すと同時に振り上げ・振り下しを一拍子で行わせるよう指導するように願いたい。

(7) 小太刀半身の構えの刃先については、中段半身の構えは刃先はやや斜め下に向け、下段半身の構えは刃先は真下に向けることで統一する。

今一度、解説書及び講習会資料を照らし合わせながら熟読し、理解した上でしっかりと指導・説明が出来るよう学んでいただきたい。

#### ○ 刀、木刀、竹刀

刀、木刀、竹刀について、それぞれの意味や扱い方を理解して頂きたい。

特に上級者は、刀について理解を進めたうえで、その使い方の理解が必要である。

- 構えた際、相手と刀及び木刀を合わせる場合は「横手」で合わせる。  
竹刀の場合、竹刀同士が交わった状態で構える人が多いが、竹刀では剣先同士は触れない距離で構える。何も意識せず、竹刀同士が交わった状態で構え、稽古を始める人が散見されるが、蹲踞の段階から竹刀の剣先同士は触れないことを指導いただきたい。
- 竹刀や木刀にて構える際は蹲踞しつつ抜き合い構えるが、納める際は蹲踞して、確実に納めてから立ち上がる。納めながら立ち上がるのではない。「納めつつ」ではないことを理解し、指導を願いたい。
- 竹刀や木刀での稽古において、鯉口を切るような動作をする者がいる。  
木刀や竹刀は腰に差していないから、抜く際の動作に鯉口を切ったり、鞘を払うなどの刀を抜くような動作はない。木刀や竹刀には鞘がないからそれら動作を行う必要がない。  
ここをしっかりと理解しておくことが必要である。  
このことが分かっているならば、木刀や竹刀で鯉口を切って抜くような動作は必要ないと理解できる。

#### ○ 刀と竹刀の振り方

刀は振りかぶってそのまま振り下ろす。刀は反りがあるから上下に振れば切れる。一方竹刀は、反りがないため円運動が求められる。円運動をしなければ相手を切ることが出来ない。

そのことをよく理解して肩や木刀による基本技稽古法に取り組んでほしい。

《実技を交えての解説》

- 木刀の場合、柄頭は体の中心部に位置する。

- 刀は蹲踞しつつ抜き合わせ、横手に合わせる。
- 刀の横手に合わせるが、刀の鑓、小鑓、横手を理解しておくこと。
- 剣先を下げる場合の高さは相手の膝頭から3～6センチメートルで、下段の構え程度に右斜め下に下げる。体の幅から外に出ないようにし、刀の重さで自然に下げること。
- 前に出る場合も後ろに下がる場合も、後足は最後に引き付ける。
- 仕太刀は小太刀を置く場所は、立ち合いの位置からそのまま真っ直ぐ5歩下がり、下座側の膝をついて下座側に刃を内側にして置く。  
かつては、仕太刀の下がる位置は斜め後ろに5歩とされていた時期もあったが、今の解釈は真っ直ぐ5歩下がり、下座側に小太刀を置くということ。これによって斜め後ろに小太刀が置かれるということ。
- 立ち合いの位置で上席への礼は30度、相互の礼は15度。
- 太刀を腰にとる際の木刀の場合は、柄頭が体の正中線に。刀の場合は鍔が体の正中線にして鍔に親指を掛ける。
- かける親指は、刃の上に置くと抜いた時親指まで切れてしまうんだよ、ということ意識させ、ちょっと内側にかける。木刀の場合は鍔の体側の窪み部分にかけるのが良い。
- すり足で進み蹲踞しつつ抜き合わせ、剣先は横手に合わせる。

#### 【一本目】

- 打太刀は、「機を見て」を理解すること。
- 「機」とは、相手の心、体、術の変わる際に起こるときの兆しを言うのであってこの部分についてはしっかり理解しておくこと。
- 打太刀は、仕太刀の柄もろとも打ち下ろす気構えで打つ。
- 相手(打太刀)の打ちを十分引き付けてから物打ちで捉える。ここでは、相手の打ちを見切って「一拍子」で打つということである。
- 仕太刀は小さく下がり、大きく踏み出して打つ。十分な気位で打太刀を圧するように打つことに心がける。
- 「気位」とは、鍛錬によって身につけられた自ら発する威力である。
- 打太刀は、正面打ちを抜かれた後の角度は45度。上体はやや前傾するが、顔だけ上がるような姿にはならないこと。抜かれた太刀の剣先の高さは下段程度とする。
- ここで求められることは、「打突部位を正確に打つ」ということであり、一本目の中で最も大切な部分である。
- 仕太刀は、抜いた時と打つ時は二拍子ではなく、一拍子で行う。待つて打たない。攻めて、攻めて、勝機を逃さず打つということである。  
だからこそ、二拍子になってはならないということ。  
引くときは反動を付けず、刀の反りを利用する。

- 打つ際は、物打ちが届かないようなことが無い様にし、手の内はしっかりと、刀を振る場合はそのまま振り下ろせば正面になる。  
竹刀の場合は、反りが無いから円で打たなければきれいなんだ、ということについて、形を通じて理解しておくこと。
- 残心後に元の位置に戻るが、出来る限り抜き合わせた位置に戻るよう意識すること。

### 【二本目】

- 一足一刀の間について言えば、体格、筋力、練度などによって違うことを理解して取り組むこと。これは形の全てに言えることである。
- 剣道形二本目において小手を打つ際は、「両腕から相手が見える」程度に振りかぶる。  
一方、木刀による基本技稽古法では「打突部位が見える」程度に振りかぶる。
- 打太刀は「機を見て」打つ。これはお互いに攻め合い、仕太刀が十分になったところを打つということである。
- 打つ際は、手首の作用をしっかりと使うこと。
- 仕太刀は、打ち太刀が打ってくるのを待たず、十分に打たせて、それを見届けてから、確実に小手を抜いて打つ。
- およそ下段の高さまで下げて抜き小手を打つが、切れていない打ちはダメ。もちろん、斜め打ちもダメ。
- 半円を描くが、しっかりとすり足で止める。
- 小手打ちの際は、刀の反りを利用するのだから手首を使わず打つ。
- 形に表さない残心では、剣先を緩めない。  
十分な気位で行う。

### 【三本目】

- 打太刀、仕太刀共に「気争い」である。
- 「気争い」とは、双方の先に攻めようとする気の争い、「先の取り合い」を言う。
- 双方下段の刃は真下に向ける。
- 双方が中段になったところで、気位・位詰めである。
- 打太刀は水月を突く。仕太刀から左鑓で軽く入れ突きに萎やされ、胸部を突かれる。  
太刀の物打ちで凌ぎ、諸手をやや伸ばして左自然体で、次いで仕太刀が「位詰」により突きの氣勢で攻め寄せられるから、右自然体の構えになる。  
打太刀は、仕太刀に攻め寄せられてからは構えを解いた形になるが、大きく開かない。
- 抜き合わせた位置に戻る際は、横手交差になる。
- 仕太刀は鑓を使って萎やす。打太刀の剣先を左鑓で体の中心から外す。その時、

- 左手は体の中心線から外さない。手の内で刀を返し、手首を返して行わない。
- 「位詰」とは、相手に対して優位な姿勢であり、充実した気位で攻め寄せることである。
  - 仕太刀は二度突きしてはならない。
  - 相互に緩急強弱に心がけ、一歩目の突き、二歩目の位詰はゆっくりと。  
三、四、五歩目はやや早く進む。
  - 仕太刀の「なやし」「入れ突」は、一拍子で行う。

#### 【四本目】

- 八相の構え、脇構えの意味を理解すること。
- 八相の構えは、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる気持ちで構え、刃先は仕太刀に向ける。ただし、上段の構えにかぶってから八相の構えになるのではない。  
右拳は右肩まで下ろした形として、口から約一握り離す。
- 脇構えは、右足をひきながら刀を中段から右拳が概ね口の高さを通るくらいに大きく右に構える。体は左半身となる。  
このとき、左拳は臍の右斜め下に、約一握りのところに置くこと。左拳は曲げずに、右足の踵は床に付けない。
- 互いに小さく3歩進む。
- 打太刀は、「機を見て」左上段に変化して正面を打つ。仕太刀は脇構えから左上段に変化して正面を打つ。
- 一旦、上段に取ってから打ち込むのではなく、振りかぶりと打ちは一拍子で行う。ただし、上段に変化してからお互いに切り結ぶのであるから、外すはずがなく、斜めに打つはずもない。刃は相手に向く。
- 切り結んでから刀身の鑄を削るようにして自然に相中段になる。  
切り結びでは、足先も顔も、お互いに正面を向く。
- 切り結ぶ位置は、およそ刀の中央部であり、剣先の高さは正面の高さになる。
- 十分な気位で行い、切り結んで合気になることが大切であり、お互いに形だけ合わせる様にしてはならない。
- 双方とも、切り結びにより間合いが接近することは分かっているのだから小さく3歩前に出ている。切り結んだ後、打ち太刀が引く必要はなく、3歩進む段階で出ているのだから、最初から打ち太刀が下がらなければならないような進み方をしなければよい話である。
- 仕太刀の構えについては、打太刀から刀は見えない構えであること。つまり、半身の構えになるので、刀身は体の幅から見えてはならない。
- 仕太刀が進む際は、半身の構えでそのまま進むため大きく進むことはできず、小さく進むことになる。
- 打太刀が間合いに接し、「機を見て」構えを上段に変化して仕太刀に打ち込む

から仕太刀はすかさず切り結ぶ。意識は、打太刀に合わせるのではない。

- 切り結びの剣先の高さは、ほぼ頭の高さにあり、中段になって打太刀が突く鼻に仕太刀は巻き返して正面を打つ。
- 巻き返しは正しく行い、巻き返しと打ちは一拍子で行う。
- 巻き返しの際の左足の位置は、間合に応じて鋭角に出すか、鈍角に出すか、という理に沿った形で対することとなる。

#### 【五本目】

- 打太刀の切り下げる位置は、一本目と違い、相手の顎までの高さである。
- 仕太刀が十分な残心を示したのちに返るが、その際、刀の合わせる位置は横手である。
- 仕太刀は、打太刀が正面に来る刹那に摺り上げる。  
十分に引き付けてから摺り上げる。
- 打太刀は、摺り上げやすい様に正面を打ち、仕太刀は物打ちでしっかりと正面を打った後に上段を構えるが、その際、一方の足を移動させたときは、他方の足は必ず伴って移動する。

#### 【六本目】

- 打太刀は中段のまま進み、仕太刀が下段になっているからと言って、進む前から中段の構えを下げることはない様にする。
- 仕太刀が下段から打太刀の両拳の中心を攻める氣勢で剣先を上げてくるので、それに応じる心持で剣先を下げる。
- 打太刀は、仕太刀から常に攻められている状態にあるため、相互の剣先が交差する寸前に上段に上げる。交差してから上段に上げるのでは遅い。  
また、仕太刀が下段から中段に変化していくときに剣先を下げるが、そのとき刀を斜めにせず刃先は下を向く。
- 打太刀が小手を摺り上げられて小手を打たれた後に仕太刀は残心を示すが、その際、打太刀は仕太刀に正対しないが、残心時には顔を仕太刀に必ず向ける。
- 打太刀が小手を打つ際は、打突部位を正確に、必ず、しっかりと小手を打つ。
- 仕太刀は、下段から両拳を攻め勝ってから、打太刀が上段をとる左拳に剣先をつけながら間合に入る。五本目の構えと同じ構えである。
- 小手の摺り上げは、刀の右鑄で半円を描きながら行う。
- 足さばきは、原則として一方の足が動いていく(進んでいく・移動していく)のだから、他方の足は必ずつける。  
ただし、間合いや動きに等場合によっては必ずしもそうならない場面もあることを理解しておく。
- 打太刀は、摺り上げ小手を打たれた後は、間合いを取ろうとするため速やかに後退する。仕太刀はその機を逃さずに攻めながら前に出ること。

つまり、双方の気が切れないことが重要である。

- 仕太刀は、右鑓を使い、物打ちで打突することに心がける。
- 仕太刀が上段に取って残心を示すときの打太刀の剣先は下段より低い位置になる。

### 【七本目】

- 打太刀は、気当たりで鑓ですり込みながら正しく胸部を突く。
- 気当たりとは、相手を打つ、突くという気持ちで攻め、相手の心や動きの反応を予知することである。

七本目では、気当たりしている部分は胸部である。

- 気当たりの際、仕太刀は相突きの氣勢で支えるが、左手でしっかりと支えるから剣先が浮き上がるという意味を理解すること。

だから、交差した物打ちの高さは概ね「肩の高さ」になる。

- 打太刀は、左足を踏み出して振りかぶって正面を打つが、仕太刀との気合がかぶったり、打太刀の気合が遅れることがない様に左足の踏み出しで「ヤー」との気合をかけ、真っ直ぐに振り上げて真っ直ぐに振り下ろす。

捨て身なのでやや大きく前傾する。

- 打太刀の目付はこの時一瞬離れるが、打ち終わって直ちに、肩越しに相手に顔を向ける。

- 立ち上がる際、打太刀は仕太刀を引き起こす気持ちで縁を切らずに下がる。

- 仕太刀は太刀を支える際、刃先を斜め下に向けるが、下がり過ぎない様に、縁が切れないように心がける。

- 仕太刀は胴を打った後、諸手は十分に伸ばして、刀と手はほぼ平行に、右腕の延長上にして右斜め前に取る。

その際の刀は、下がり過ぎず、上がり過ぎず、平行を意識する。

- 仕太刀が残心を示すために打太刀は振り向くが、以前、仕太刀は脇構えをとる様な説明もあったが、膝をついた状態で脇構えを取ることは不可能(剣先が地面に接してしまい、正しい脇構えではない)であるため、「脇に取る」となっている。「脇構えを取る」ではない。

- 仕太刀が立ち上がって双方中段になった後に元の位置に戻る際は、ここに記載はないものの、打太刀が多少早めに動くことが良い。

それは仕太刀が打太刀に合わせて多少遅れて移動することで、横手に合わせた刀が前後したり、上下するなどブレることなくきれいに戻ることが出来るためである。

- 仕太刀は、胴を抜く際、右足を右前に開くとき、体は動かさない。

左足を前に出すときに太刀を左斜めに振り上げ振り下ろす(斜めに抜き、1拍子で行う)。

★太刀の形で気を付けるべき点(共通)

- 原本通りと考えて取り組んでいただきたい。
- 分解指導も効果的であると考えている。
- 「機」を見て打つことを意識する。相手が十分になったところを打つ。
- 相手には十分に残心を占めさせてから、次の行動に移る。
- 仕太刀は打突部員届いていることを意識する。
- 太刀5本目は、巢利上げであって払いではない。
- 緩急強弱がない。

#### 【小太刀・一本目】

- 太刀と小太刀の違いを理解する。  
中段に構えた時、47cm 違う訳であるから、小太刀が太刀と同じ対応となる攻め合いとなるために右手を出して半身になり、左肩を開く。
- 「入り身になろうとする」とは、「入り身」になっていないのであるから、形には現さない状態である。
- 小太刀を構えた時の右手については、四指でしっかり握り、親指を付ける。手首を柔らかくするが、握りは緩めない。
- 左手は水を掬った形を意識して腰にとる。構えを解いた際は左手から掬った水が落ちる様に下げる。
- 打太刀は機を見て打突するが、機を見てとは、相手が十分な状態にあることである。
- 仕太刀の「入り身」とは、氣勢充実して相手の手元に飛び込んでいく状態をいうのであり、打太刀は仕太刀に入り身になられたら負けである。  
だからこそ「入り身にならんとするところ」を「機を見て」打突するのである。
- 呼吸も含めて、合気で行うことが最も重要である。
- 仕太刀の残心を示す上段は、諸手左上段の左手を外した形であり、右手はそのまま残った上で上段を取っている、そういう位置にあるということを理解して構えること。
- 仕太刀小太刀の剣先は、打太刀上段左手の延長上に置く。
- 正面を受け流す際の刃先は後ろを向け、頭上で受ける形をとり、右拳は自分のオデコの線上45°とする。

#### 【小太刀・二本目】

- 打太刀は、仕太刀の下段に対する構えとなるが、右膝を若干前に出す。
- 打太刀が、下段から中段になる寸前、仕太刀の攻めに応じるためそのままの高さで脇構えに取る。
- その直後に、脇構えから変化して諸手左上段に変化して正面を打ち下ろすが、右足の踵を床につけると二拍子の打ちになってしまうため、踵は床に付けない。
- 打太刀は、仕太刀の正面を大きく打つ。

それは、仕太刀が右鑓を使って受け流しが出来るためであり、小さな面やその場での面打ちでは、仕太刀は刃で受ける形になってしまい理に合わなくなる。

- 打太刀が下段から中段になるのは、仕太刀の中段の攻めに対して、自身を守るために中段になろうとする意味である。

その際、仕太刀は打太刀が下段から中段になろうとする瞬間、入り身になる時なので刃先は右斜めに変化していく。

- 仕太刀の刃先については、最初は中段やや低く構えるのだから下を向く。

打太刀が下段から中段になろうとする刹那は斜め右下に向け、中段から脇構えになろうとする瞬間に制して「入り身」になるとき、斜め下を向いた刃先は、今度は下へと変化する。

- 仕太刀の残心では、左手は打太刀の右ひじ関節より上を極める。
- 右手の小太刀は、自分の体の正面に構えるという誤った動作を取る者が見られるが、右腰に取るのである。

#### 【小太刀・三本目】

- 打太刀の構えは下段半身の構えであるので、刃先は真下になる。
- 打太刀は、仕太刀が入り身になろうとするところを正面に打ち下ろすのであって、「右足を出しながら振りかぶり」「左足を引き付けながら打つ」のではない。
- 打太刀の右足が出ようとするところが、仕太刀が入り身になろうとするところである。そこが打太刀の正面を打つタイミングである。
- 打太刀が正面を打ち、仕太刀がそれに対して「摺り上げ」「摺り落とし」「摺り流し」「摺り込み」の順に仕太刀は進めていくが、この段階では未だ勝負はついていない状態にあることを理解する。
- 打太刀は間合いを取って下がる意味は、勝負がついていない状態を打開しようとするためである。

そこを仕太刀が前に出て、打太刀の腕の自由を制して極めるため、残心を取って決するということになる。

- 小太刀と太刀は長さで47センチほど違うが、太刀の長さを同じにして対等に構えるのが小太刀の構えであることを理解する。
- 特に、三本目の小太刀による「摺り落とし」は、「巻き落とし」ではないので「巻き落とし」にならない様に理解する。
- 「摺り込み」の際は、両手同時に作用する(左手は打太刀の肘を抑える)とき、掛け声を「トウ」と掛ける。
- 二本目と三本目の足の移動については、三本目は、二本目よりも遠い位置を中段に帰るのだから左足から移動する、と理解すること。

#### ★小太刀の形で気を付けるべき点

- 一本目は、仕太刀の剣先は打太刀の両目の間に剣先を。

打太刀は、面を打たれる際は体は正面を向かずとも顔は相手に向ける。  
仕太刀は受け流すのだから、大きく捌く必要はない。

- 二本目は胸の高さに剣先を置き、重心を落として構えることで剣先が胸の高さになるということ。

打太刀は、下段から脇構えに移行後、正面を打つが止まってはならない。  
この場面でも一本目同様に、仕太刀に顔に向ける。

仕太刀は、入り身が2ヶ所あることを意識する。

- 三本目は下段である。いずれも半身の構えであり、右足をやや前に出し、左肩をひく。

打太刀は、正面を打った際、「摺り上げ」「摺り落とし」によってわずかに体が崩れるから左足を踏み込んで胴を打つ、ということを理解しておくとうりやすい。

仕太刀は、「摺り込み」の際、手首をしっかり起こして立てる(角度に注意)。

- 打突は必ず一拍子で行う。

#### 《総括》

それぞれ癖がある。解説書と講習会資料を熟読の上、しっかりと中身をかみ砕いた上で身に着けて頂きたい。

#### 【剣道未来プロジェクト(KFP)報告】(奈良隆講師)

～取組状況と今後の展望～

- 日本では人口減が進んでいる。(PP①)

それに伴い剣道人口も大きく減少しており、特に、若年層の減少が大きな課題となっている。

全国的に見ても、高校剣道人口は昭和 59 年のピーク時を境に減少が進み、令和 3 年には 3 万 1,000 人と3分の1まで減少するなど、高校生全体の人口減を大きく上回っている。

- KFP組織の課題

若年層対策～中体連は 63,000 人、高体連は 31,000 人。

現在、新たな要素が出てきており、多様な理由により現状している。

全剣連では、20 周年記念誌にも剣道の課題として掲載し、剣道の普及と人口増について取組を進めてきたところである。

- いままでやってきたことに問題はありますか…

全剣連はじめ剣道界で今まで進めてきたこと、行ってきた取り組みなどに決して間違いはないと考えている。現在までの取り組みや今後の施策は、これまでのこと全てを踏まえて拡大していると理解していただきたい。

今後、剣道の内的課題を広めていく必要がある。

剣道の素晴らしさ、文化、教育的価値など。

これらは、外に向けてどう発信していくのか、さらにどのようにして取り組ん

でいくのか、ということの意味している。

○ KFP組織の特性及び目指すところ(資料P-10、11)

剣道に取り組んでいく中で、コンプライアンス違反や不適切指導などが存在すること自体、「ありえない」「論外だ！」と認識して頂きたい。

★そのためにやるべきこととは???

当たり前のことをやる。やってはならないことはやらない。が求められている。そのことを続けていくことこそ、剣道文化を発展させるための行動である。

○ KFPの行う3つの事業(資料P-13.14)

1.各種意識調査(資料P-17.18.19.20)

各種世代に対して意識調査を実施し、データ収集・分析・評価を行い新たな具体的背策の構築に向けて取り組んでいる。

小中高校生の意識調査結果は、全国から3,160件の回答が集まった。

剣道を始めた理由には、自分の意志で始めたとの回答が4割を超えている。

ただし、剣道以外の習い事をやっている者は5割以上であり、殆どが学習塾である。

3分の2は、今後も続ける意思を持っており明るい結果と判断。

課題)

続けたい者がいるのに拘わらず減少しているということは、剣道から離れさせないためのヒントを見つける必要がある。

その中には、指導者の問題(痛い。痛いのに痛いと言わせない。意識。指導法など)。

具体的に施策を検討し進めて行くことで、又は、負の取り組みをさせないことで良い結果につながるヒントを見いだせる。

今後のワーキンググループ等で検討を進める予定。

○ 今後の取り組み(資料P-21.22)

これまでは子供等を対象としていたところ、今後は指導者を対象とした調査を予定している。

また、好事例に係るヒアリングの実施も想定中であり、各組織等で結果として剣道人口増加につながった事例を確認したり紹介していく。

例えば、幼稚園等での取り組みについて訪問により聴取するなど。

2.広報関係事業(資料P-23～29)

新たな媒体を活用した外部への発信活動を実施している。

○ 映画のコマの間や上映開始前のコマーシャル画像に展開している。

「鬼滅の刃」。現在は13映画館。(東京、神奈川、千葉、埼玉)

結果として、理論上ではあるが50万人以上が聴取した。

「やろうや剣道」15美容間のCM映像。使う方は積極的に使ってほしい。

○ ハッシュタグキャンペーン

まもなく実施予定である。積極的に発信して欲しい。添付のQRコードから。

### 3. イベント等への応援・後援の実施(P-30～)

- 新たに剣道人口を増やす取り組みとして実施する事業＝後援事業  
「佐藤あかり」の「スマイル剣道祭」の後援
- 未来志向の取り組み事業＝応援事業  
「古田花恋」さんの大阪万博での展示を応援
- KFP事業のイメージ(資料P-39)  
サイクルを回して活性化を進める。
- 課題(資料P-40)
  - 1. 特効薬はない  
⇒ いろいろ考えてやっていく！という意味
  - 2. 施策憲章には時間が必要  
⇒ 効果が出るのは今日・明日ではない。何年か先に。  
「時間が必要」を言い訳にせず、成果に関する評価を見ながら新たな取り組みを進めていく。
- 終わりに  
試行錯誤の中、関係者等あらゆる方々から色々な話を聞きたい。良い提案のみならず、問題・課題も寄せて頂きたい。  
KFPは、色々話を聞きながら、色々と考えて、具体的取り組みを進めていく団体・組織であるとうご理解いただきたい。

### 【質疑】

#### 1. 愛媛

##### Q1

愛媛では、KFPアンケートに協力した。

- アンケート結果は今月5月末には公表するとの説明であったが、
  - データ全てを開示してくれるのか
  - 内容を示すのか
  - 剣連だけに示し、他には公表予定はあるのか
- 中学生等では剣道にあこがれを持っている者もいると聞いている。
  - さきほどの映像やリーフレット資料など中学校等に提供配布しても良いのか。

##### A1

- データ公開は、プロジェクト内で検証した上で全剣連HPにて公開する予定。  
ただし、全てのデータは公表しないのでご理解願いたい。
- リーフレット等はどんどんご活用願いたい。  
映画でのシネマ広報動画についても活用可能である。活用する際は、全剣連に問い合わせ頂ければ問題ない。

#### 2. 福井

## Q2

### ○ 未来プロジェクトに関する要望。

幼年層への働きかけを更に低年齢化すれば効果があるはず。

幼年剣道は3歳から始まっているところもある。サッカーやバスケットでは、既に3歳児から幼稚園などで取り入れているところが多い。

スポーツ協会の保険加入も3歳以上で加入可能であることを鑑みて、剣道でも人口減少を食い止める対策として積極的に進めるべきではないかと思う。

福井では3歳児から取り組んでいるところもあり、遊びの要素を取りいれて行っている。反対に考えれば、遊びの要素がなければ続かない。

全剣連で考えてみては如何か。

### ○ 中学部活の地域移行について

令和8年中教審でのアンケートには、生徒・教員・親・一般スポーツクラブ等から回答を得ている。

アンケート結果を見れば、中学校の先生のみが「移行に賛成」であり、その他は反対が多数である。

そういった中、学校の先生の働き形改革のみが先行的に進んでいる。

福井では、平日は部活を行っても、土日は部活出来ない。

また、土日に行われる大会があれば、部活として出場できず、どうしてもスポーツクラブ等の名前で出場せざるを得ず、更に、学校関係者は引率が出来ず、又は、声をかけても来ずに、引率者や監督者はスポーツクラブに丸投げになっているのが現状である。

福井県では、知事はじめ県幹部まで中学部活の地域移行に反対の態度を示しており、今後文科省にも働きかけを行おうか、という動きさえある。

全剣連としても、貴重な人材確保、剣道人口減少を防ぐためにも、組織として文部科学省に働きかけを行っていただきたい。

## A2

貴重なご意見、ご要望として受け止めたい。

ただし、2つ目のご意見は難しい問題がある。時間を頂きたい。

## 3.静岡

### ○ 試合における反則の判断について

## Q3

本県内での大会決勝戦・大将戦での出来事。一方のチーム大将は一本取得しなければ勝てない。ところが他方のチーム大将は十分にわかっているため、竹刀を払ったり、剣先を押さえたり、叩いたり、前に出ず、決して自分から打ちに行かなかった。

そうした中、それら行為に対して審判員は合議の上反則を徴し宣告した。

聞くとところによるとその反則は「時間空費」であったとのことであったが、打突せずに間合を詰めたり、防御の姿勢で打たせなかったわけではなく、周囲

からは反則の乱用ではないのか、との声も出ていた。

審判を実施する上でこれら事例について見解を頂きたい。

A3

時間空費行為は、避けて打たなかったり、間合いを詰めて打たせなかった場合のみではない。試合においては様々な状況が発生し、それら状況に応じて対応しているものと承知している。

当該事象については、実際に見ているものではないので名言は避けたいが、審判員の判断の中でそれら様々な状況を総合的に判断して公明正大に試合をしているか否か、などの中からその選手が「時間空費」を行っているという判断に至り、反則を徴したものと理解している。審判員相互の判断は尊重されるべきである。